

# 保育者養成校における地域資源を活かした 「自然体験活動」「ESD/SDGs」と養成教育における効果と課題

舟越 美幸\*・堅田 弘行\*・加藤 友彦\*・高橋 泰道\*\*

## 要約

2022年11月に全国保育士養成協議会中・四国ブロックに加盟する養成校に所属し、保育内容「環境」、自然や環境に関わる授業を担当する教員を対象に質問紙調査を実施した。調査では「自然体験活動」(「野外活動」,「自然・環境に関わる学習活動」,「自然物を使った文化・芸術活動」,「一次産業(農業・漁業)」)と、「環境教育」の5項目に対して、養成教育における教育効果と課題について考察を行った。養成校教員は、養成校に通う多くの学生の、自然や環境、動植物に対して関わった経験の乏しさを指摘している。この経験不足に対し、授業やゼミ活動の中で、自然や環境などに関わる実体験を取り入れ、学生たちの興味・関心を高めたり、ポジティブ感情を生み出したりする工夫が行われていた。また、実体験は、持続可能な社会の創り手として学びを得る機会であり、自然や環境への意識向上につながることを期待できる。そして、体験を通して様々な学びがあり、環境構成や指導案作成に活かすことで、知識と体験が伴う保育実践にもつながることが期待できる。さらに地域資源と連携・協働した自然体験活動やESD活動を取り入れた授業やゼミ活動は、保育現場と養成校の質の向上や養成校の地域における信頼性の高まりが期待できる。

キーワード：保育者養成、自然体験活動、環境教育、ESD/SDGs、地域資源との連携協働

2023年12月25日受理

## I. 背景と目的

### 1. 先行研究の整理

#### (1) 自然体験活動とESD/SDGs

2017年3月末の幼稚園及び小・中学校の新学習指導要領公示と同時に保育・幼児教育に関わる三法令が改訂され、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つとして「自然との関わり・生命尊重」が掲げられた。近年、幼児教育の重要性が国際的に議論される中、自然の中でリラックスし夢中になって遊ぶ機会の減少と「非認知能力」低下の関連性が指摘され<sup>1)</sup>、自然を活用した保育実践は「非認知能力」を育む有効な方法と考えられている。

我が国でも自然を活用した保育の質の向上を図る取り組みと非認知能力を関連させた研究は拡がりを見せ、乳幼児期の心を揺さぶる自然体験活動が、非認知能力を育むかけがえのないものであることが明らかになっている<sup>2)</sup>。また、いずれも児童期の子どもを対象とした短期間の自然体験活動において、「根気」と

「興味の一貫性」の下位尺度からなるGrit(やり抜く力)の向上<sup>3)</sup>や、「リーダーシップ行動」「協調的行動」の増加と「自己中心的行動」の減少等、非認知能力の教育的効果が報告されている<sup>4)</sup>。

さらに、「持続可能な開発のための教育(ESD/SDGs)」は、地球の大自然を土台に環境・社会・経済の持続・開発を考える後継者(担い手)を育む教育活動として、環境教育が柱の一つとなっている<sup>5)</sup>。環境教育については、「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」第9条において、幼児期からその発達段階に応じて、あらゆる機会を通じて環境の保全について理解と関心を深めることが重要であるとされており、幼児期の環境教育では、生きる力の基礎を培う時期であるとして、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどと触れる体験を通して豊かな感情や好奇心、思考力や表現力の基礎が培われることが重視されている<sup>6)</sup>。また、2016年中央教育審議会答申では「ESDは次期学習指導要領改訂の全体において基盤と

\*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

\*\*島根県立大学 人間文化学部 保育教育学科

なる理念である」<sup>7)</sup>と掲げられ、持続可能な社会づくり、ESD・SDGsを広めるためには、園庭や地域資源を組み合わせた十分な自然体験の環境構成が一層必要だと考えられている<sup>8)</sup>。

## (2) 養成校と地域資源<sup>注1)</sup>の連携協働

保育者養成校は、地域に根差した高等教育機関として、自然保育を実践する人材育成を行うため、授業の有効活用を積極的に検討する必要がある<sup>9)</sup>。また、その教育的効果として、学生が行う散歩の前後について比較検討した結果、リーダーシップや対人関係スキルに有意な差が見られたこと<sup>10)</sup>、「保育内容 環境」の授業で、草花遊び、紙飛行機遊び、栽培収穫活動、飼育活動を行うことで、学生自身の自然体験活動に対するポジティブな印象への変化があったことが報告されている<sup>11)</sup>。他にも野外活動実習でコミュニケーション力や自然体験活動への動機づけに対して効果が見られたこと<sup>12)</sup>が示されており、各養成校教員は授業内で様々な地域の「自然」を活用したフィールドワークを取り入れ、その教育的効果を明らかにしている。

一方、養成校教員と地域との連携協働については、自然保育や野外教育の専門家を講師とした研修会・現場の保育者によるシンポジウム・大学職員の野外保育団体への視察等や養成校学生にボランティア参加を募ることで地域基盤社会に対応した人材養成を行う必要性を論じた報告<sup>13)</sup>や幼児期の環境教育推進にあたり、自然や環境に関する研修の必要性を訴えた報告<sup>14)</sup>、自治体が主導する「自然保育」を推進するための認定・認証制度が、自然を活用した保育の実施度を高めているという報告<sup>15)</sup>もあり、養成校教員には、地域資源を活かした地域人材養成等に貢献する役割を担う必要があると考えられる。これらに関連し、保育現場で自然体験活動を実践するための方法、地域社会や生活に関わる人材発掘・連携に苦慮している例が見受けられることから、保育現場と保育者養成校における教育内容の連携によって地域生活の活動なども捉えた総合的な自然体験プログラムへの展開が望まれるという指摘もある<sup>16)</sup>。

## 2. 研究の目的

先行研究より、保育・幼児教育現場では、持続可能な社会の実現に向け地域資源である自然や環境を活用した保育、自然と共生を目指す保育の充実が目指さ

れ、各養成校ではその地域の特性を活かした自然体験活動に関する養成教育や地域人材育成を目的とした研修が行われていることが示唆された。しかし、その一方で保育者養成教育においては、学生の中での自然体験不足<sup>17)</sup>や虫嫌い<sup>18)</sup>が指摘されている。また2年制の短期大学においては、カリキュラムの過密さから養成教育での自然体験活動や環境教育の実践には課題が散見されることが予測される。

2022年5月10日の教育未来創造会議「我が国をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）」において、養成校と地域が連携・協働し、地域全体で社会との多様な関わりや体験・交流の機会を得られる取り組みの促進が求められている<sup>19)</sup>。養成校教員が地域と連携・協働体制を作り、保育現場と学び合いながら自然や環境を活用した保育者養成を行うことは地域の自然や環境を活用した保育を活性化させるだけでなく、地域における保育課題を学生が実践的・主体的に学び、より地域に根付いた自然体験活動や環境教育の経験知を持つ保育者養成に繋がることを期待できる。しかし、それらに関連した科目を担当する保育者養成校教員を対象に自然体験活動と環境教育の教育内容の効果や課題、地域資源と関連付けた研究はなく実態調査を行う意義は大きい。

体験活動は、平成19年中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」<sup>20)</sup>の中で、「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」とされており、本研究においてもその定義を採用する。さらに、自然体験活動については、「例えば登山やキャンプ、ハイキング等といった野外活動、又は星空観察や動植物観察といった自然・環境に関わる学習活動である」とあることから自然体験活動を自然の中で自然を利用して行う各種活動として、以下4項目「キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった『野外活動』」、「動植物や星の観察といった『自然・環境学習活動』」、「自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった『自然物を使った文化・芸術活動』」、「一次産業体験（農作業体験、漁業体験等）」などを含んだ総合的な活動とある。本研究は、この定義に「環境教育」を加えた計5項目をもとに、各養成校授業内の地域資源を活用した自然体験活動・環境教育に該当するフィールドワークの内容、養成校教員と地域資源との連携・協働の実態を調査し、期待できる効果とそ

の課題について明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

### 調査の内容と方法

#### (1) 調査の方法

調査は2種類の方法によって実施した。まず、2022年11月に保育内容「環境」、自然や環境に関わる授業を担当する教員を対象に質問紙を郵送し、Google Formsを用いて回答を求めた(調査1)。さらに、回答を得られた教員の中でヒアリング調査に協力していただける協力者を募り、2023年1月にZoom Cloud Meetingsを用いて半構造化面接を用いヒアリング調査を実施した。聞き取った内容は、調査協力者の同意に基づき、録音を行い記録し、その概要を分析データとしてまとめる(調査2)。

#### (2) 調査対象者の属性

調査の対象者は全国保育士養成協議会中・四国ブロックに加盟する養成校に所属しており、保育内容「環境」、自然や環境に関わる授業を担当する教員とした。

#### (3) 調査の内容

##### ①調査1：質問紙調査

質問項目は次の通りである。

##### A：教育課程における自然体験活動の実施形態

「①登山やキャンプ、ハイキング等の野外活動」、  
「②星空観察や動植物観察等、自然・環境に関わる活動」、  
「③自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動」、  
「④一次産業体験(農作業体験・漁業体験)」、  
「⑤環境教育」の実施形態についてそれぞれ、「教員の研究活動として」、「授業の一環として」、「ゼミ活動の一環として」、「卒業研究として」から選択式で回答を求めた。

##### B：内容と教育的効果

①～⑤の取り組みについて、回答者に対し、教育内容と教育的効果について自由記述で回答を求めた。

##### C：地域資源との関わり

養成校教員が人材、施設、コミュニティ、自然といった地域資源と関わりを持つことの必要性について、「1. とても必要だと思う」、「2. やや必要だと思う」、「3. どちらともいえない」、「4. あまり必要がないと思う」、「5. 全く必要がないと思う」の5件

法によって回答を求めた。また、関わりのある地域資源について、「1. 地域の人材」、「2. 地域の文化」、「3. 地域の施設」、「4. 地域のコミュニティ」、「5. 地域の自然」から回答を求め、回答のあった項目について、その具体的内容と効果について回答を求めた。

さらに、地域資源との関わり方の必要性について、「1. とても必要だと思う」、「2. やや必要だと思う」と回答した者に、「養成校と保育・幼児教育施設が、地域資源を活かした自然や環境等に関わる体験活動を通じ、連携・協働した保育者養成」がどの程度できているか、「1. 十分にできていると思う」、「2. 十分にできている方だと思う」、「3. どちらともいえない」、「4. やや不十分だと思う」、「5. かなり不十分だと思う」の5件法で回答を求めた。ここで「4. やや不十分だと思う」、「5. かなり不十分だと思う」と回答した者に対しては、連携・協働した保育者養成が難しい原因について、自由記述で回答を求めた。

##### D：現職研修・園内研修と保育者養成に与える影響

自然や環境に関わる現職研修と園内研修の実施経験の有無を尋ねた。ここで経験があると回答をした者に対して、「行政」や「保育現場」との連携・協働の有無、さらにその内容や効果について回答を求めた。

また、所属している養成機関において、自然や環境に関わる認定講習や資格講習の実施の有無について回答を求めた。ここでも実施していると回答をした者に対して、その講習名や内容、保育者養成に与える影響について回答を求めた。

##### E：園外の体験活動充実のための方策

保育・幼児教育施設が園外の体験活動を充実させていくために必要なこととして、「研修の充実」、「職員数の確保」、「予算の補助」、「保育時間の確保」「自然や環境に関する知識や情報」「施設や文化に関する知識や情報」「リスク管理の知識や情報」「人材やコミュニティの知識や情報」のそれぞれに対し、「1. とても必要だと思う」、「2. やや必要があると思う」、「3. どちらともいえない」、「4. あまり必要がないと思う」、「5. 全く必要がないと思う」から回答を求めた。また、これらの項目以外に、保育・幼児教育現場が園外における体験活動の実施を充実させていくために必要なものについて自由記述で回答を求めた。

##### ②調査2：ヒアリング調査

調査は主に次の6つの質問によって行った。

質問1：授業やゼミの中で地域のコミュニティや小学校、保育所、幼稚園などどのような連携をとっていますか。

質問2：地域との連携によって学生の学びへどのように繋がっていくと考えられますか。

質問3：現在行っている地域連携以外で連携したい地域資源はありますか。

質問4：事前に行ったアンケート調査によって、「学生の自然体験の体験不足」や自然と触れ合う経験が不足しているための、「苦手意識」があるという回答が得られました。養成課程の中でそのように感じたことはありますか。またそれに対してどのような工夫をされていますか。

質問5：地域と連携した養成教育を行う上で課題となることはありますか。

質問6：保育者の体験不足、知識不足についてどのように考えていますか。また、保育者を対象にした研修を実施したことがありますか。

## 2. データの分析方法

質問紙調査で得られた量的データは図でその特徴を示すこととした。自由記述などで得られた質的データはKJ法によって分析することとした。ヒアリング調査で得られた回答については、養成校における実践例として紹介し、発言の内容から類似点を考察する。

## 3. 倫理的配慮

本調査の実施にあたり、依頼文に研究の趣旨や個人情報保護の遵守を明記し、調査の回答をもって、調査参加の同意を得たものをみなした。また回答はすべて整理番号に従って処理し、個々の所属や回答者が判別できないように配慮した。

## Ⅲ 結果と考察

質問紙調査では、14名・14学科の教員（私立85.7%・公立14.3%/四年制大学35.7%・短期大学64.3%）から回答が得られた（回収率21.9%）。ヒアリング調査では4名の教員の協力を得ることができ、これら2つの調査の結果と考察を以下に記す。

### 1. 調査1

#### 1) 養成校における自然体験活動・ESD/SDGs

#### (1) A:実施状況

回答者の所属する養成校の学生に対する「①登山やキャンプ・ハイキング等の野外活動」、「②星空観察や動植物観察等、自然・環境に関わる学習活動」、「③自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動」、「④一次産業体験（農作業・漁業体験など）」、「⑤環境教育」の自然体験活動やESD（自然・環境）に関わるフィールドワークを通じた教育形態を図1に示す。

授業とゼミ活動を合わせた実施率が最も高かったのは「自然・環境に関わる学習活動」（78.6%）で、次いで「自然物を使った文化・芸術活動」（57.2%）であった。「野外活動」と「一次産業」は共に実施率は28.6%と低かった。

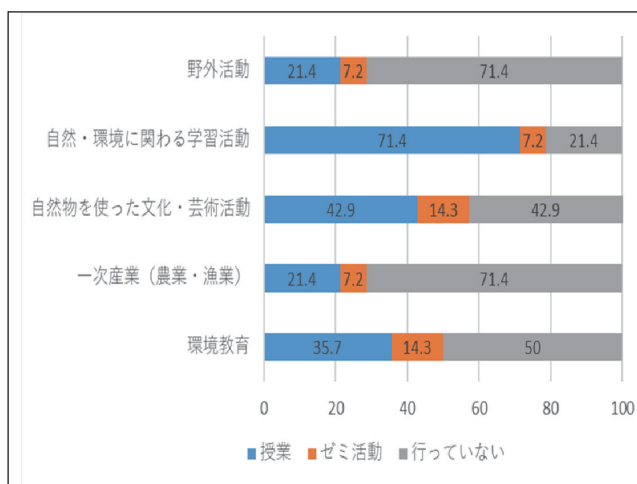


図1 養成校の自然体験活動・ESDの実態

#### (2) B:教育内容と教育的効果

次に教育内容について得られた回答を以下に示す。

##### ①野外活動

- ・1年次に2泊3日のキャンプ。2年次に自然観察実習、釣りや1泊2日の野外炊飯。
- ・企業や子育て支援団体と連携。地域の子どもたちに自然・野外体験の企画提供PBL活動。

##### ②自然・環境に関わる学習活動

- ・昆虫の採集。
- ・魚の飼育。
- ・動物や植物の観察。
- ・キャンプ実習の夜に天体望遠鏡を使った星空観察。
- ・原体験効果。
- ・四季を感じる自然物を使って遊ぶ等の教材研究。
- ・フィールドビンゴ等のネイチャーゲーム。

- ・自然豊かな幼稚園の環境構成を学ぶ。
- ・近くの公園の環境マップ作り。指導案作成。

### ③自然物を使った文化・芸術活動

- ・松かさやドングリ，子どもたちと竹を切り倒し工作。
- ・笹舟や笹笛などの草花遊び。
- ・キャンパス内の木々や落ち葉，栽培した野菜を飾り環境構成。
- ・昆虫の生態のクイズブック。
- ・自然の中でコンサート。わらべうた遊び。

### ④一次産業（農業・漁業）

- ・さつまいもや野菜の栽培。
- ・タケノコ掘り。
- ・保育現場と野菜栽培。収穫体験。クッキング。

### ⑤環境教育

- ・大学周辺地域の美化活動。
- ・ごみの分別，節電や節水等，できることから取り組む大切さについて話し合い。
- ・地域のボランティアの方が整備した竹林で地域の小学生に竹林体験学習（全国の放置竹林問題やプラスチック問題を考える）を実施。

次に，授業とゼミ活動での自然体験活動・ESDの取り組みに対する教育的効果についてKJ法によって5つの大カテゴリー，14個の小カテゴリーを抽出した。

## 【1. 学生の体験不足・苦手意識の解消】

- ①未体験／経験が少ない学生の多さ
- ②苦手意識

## 【2. 実体験の重視性】

- ③自然を感じる
- ④実体験の重要性

## 【3. プラスの感情】

- ⑤気持ちよさや解放感
- ⑥面白さ
- ⑦感動
- ⑧興味や関心

## 【4. 自然・環境への意識の向上】

- ⑨自然・環境について考える機会
- ⑩持続可能な社会の創り手として学びを得る機会

## 【5. 知識・体験が伴う保育実践】

- ⑪知識として得られる学び
- ⑫体験を通して得られる学び
- ⑬文化や伝統と関連する学び

## ⑭環境構成／指導案作成／保育実践

## 2) C：地域資源との関わり

### (1) 地域資源との関わり

この項目では，回答者がどのような地域資源と関わりがあるのか，その結果を図2に，さらに，回答者が関わっている人材やコミュニティを図3に示す。

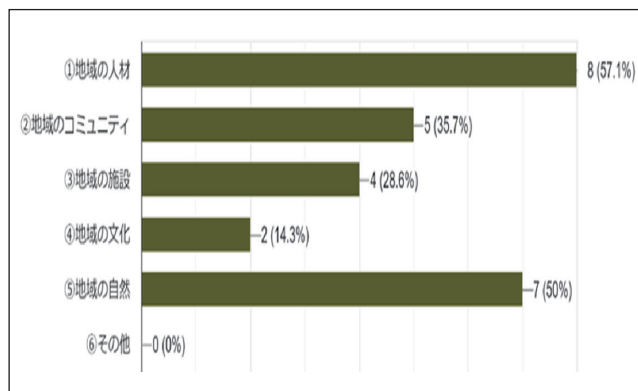


図2：関わりのある地域資源

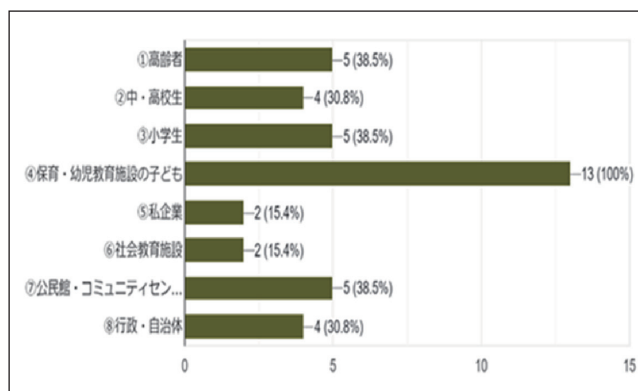


図3：関わりのある人材やコミュニティ

図2に示すように，14名の回答者の内，13名から地域資源と連携・協働が行われていると回答があった。そのうち関わりのある地域資源について，最も回答が多かったのは，「地域の人材」の8名（57.1%），次いで「地域の自然」の7名（50.0%）であった。この地域資源との連携・協働の具体的な内容については，学生や教員が地域に活動や知識を提供するだけでなく，地域の農林高校の教員から「菜園演習」を教わるなど養成校が専門家から知識を授かるというケースもみられた。また，図3に示すように，関わりのある人材やコミュニティについて，最も多かったのは「保育・幼児教育施設」の13名（100%）であった。次に「高齢者」，「小学生」，「公民館・コミュニティセンター」の

各5名(38.5%)であった。

## (2) 養成校教員が地域資源と関わる必要性

「養成校教員が地域資源と関わりをもつことの必要性」について、回答者全員がその必要性を感じており、「とても必要だと思う」が9人(64.3%)、「やや必要だと思う」が5人(35.7%)であった。さらに養成校と保育・幼児教育施設が、地域資源を活かした自然や環境に関わる体験活動を通じ、連携・協働した保育者養成が充分に出来ているか、5件法で回答を求めた結果を図4に示す。

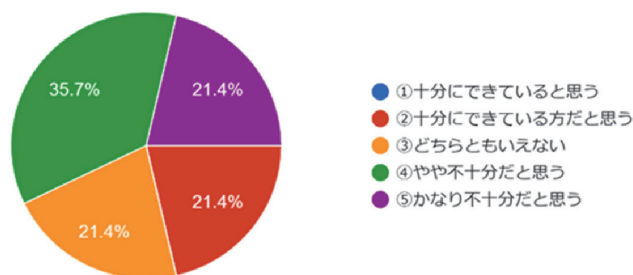


図4 養成校と保育・幼児教育施設の連携

この内、「やや不十分だと思う」、「かなり不十分だと思う」と回答した者に対して、そのような保育者養成が難しい原因について自由記述で回答を求めた。その結果、「コロナ禍における交流の難しさ」、「時間確保の難しさ」、「経費の問題」、「園選択やスケジュール調整の困難さ」、「養成校における地域資源と連携・協働した体験活動の教育的効果への理解不足」が挙げられた。

## (3) D：職研修・園内研修と養成教育に与える影響

14名中4名(28.6%)の回答者が自然や環境に関わる現職研修・園内研修を経験したことがあると回答しており、その内容は「子どもが主体的に関わる環境とは」「保護者への講演や学生の保育参加」「市の委託を受けた子育て支援のNPO団体とゼミで地域の親子に自然体験活動の提供」「保育参観と協議」と回答があった。

また、研修を担当することは保育者に知識を提供するだけでなく、養成校教員が保育者と触れ合うことで、学生に保育現場の実情を伝えるなど、養成教育に活かされていることが示された。また、単発な研修よりも、継続的な研修によって現場の保育にも変化が見

られるため継続的な研修を求めたいという回答もあった。

## (4) E：保育・幼児教育施設の園外の体験活動

保育・幼児教育施設が園外の体験活動を充実させるために必要なことについて、「研修の充実」、「職員数の確保」、「予算の補助」、「保育時間の確保」、「自然や環境に関する知識や情報」、「施設や文化に関する知識や情報」、「リスク管理の知識や情報」、「人材やコミュニティの知識や情報」、「人材やコミュニティとの連携・協働」の項目全ての回答に9割以上の回答者が「とても必要・やや必要」と回答していた。その他、保育・幼児教育現場が園外の体験活動実施を充実させていくために必要なことについて、養成校を対象とする内容として「同じ研究を行う大学等の繋がりやネットワーク」が挙げられ、保育現場を対象としては、「保育者の自然や環境に対する実践力の研修」、「保育現場での専門家派遣」、「小学校と保育現場の連携」が挙げられた。

園外保育の推進のためには、保育現場に対する知識や情報の提供を目的とした研修や予算・職員数の確保以外に、養成校同士の繋がり合いや学び合いの必要性が示された。

## (5) まとめ

各養成校では、自然や環境に対する体験不足や苦手意識を持つ学生が多い中、学生がプラスの感情を抱き、意識が向上することを期待して、地域資源と連携・協働して知識や体験が伴う特色ある活動を行っている。しかし、まだ十分とはいえない地域資源との連携・協働を深め、養成教育内容を工夫し、養成校相互のネットワークを構築し、系統だった現職研修をするなど、地域社会における体制づくりを模索し、養成教育を進める必要がある。

## 2. 調査2

### 1) 結果の概要

#### (1) 調査協力者Aの概要

調査協力者Aは私立短期大学に所属する教員である。調査実施時点において地域資源との連携を実施していなかった。地域連携を行う上での課題として、コロナ禍であるということ、2年間という養成課程の短さを挙げていた。地域資源との連携は調査協力者A自

身がまだ地域との結びつきの希薄さを感じているところがその要因に挙げられていたもののゼミ活動の中で、大学敷地内でのサツマイモ栽培を実施しているとの回答を得た。また、今後、連携を期待している地域資源として「附属園」や近隣の園や施設を挙げられた。

学生の苦手意識の克服に向けた取り組みとしては、まだ試行錯誤の段階であるとはいえ、カブトムシの幼虫に触れる機会をつくっており、今後その効果の検証を行うことを話された。

保育者の体験不足や経験不足について、保育者の研修の必要性に対し理解を示すものの、保育実習の訪問指導などで実習施設を廻った際、ほとんどの施設で自然体験活動を行っていたことを報告している。

## (2) 調査協力者Bの概要

調査協力者Bは私立大学に所属する教員である。ゼミ活動の中でNPO法人や地元の野外活動センターといった地域資源との連携を行っている。地域連携による教員の負担は大きく、主に土日の活動になるため教員のオーバーロードにつながる懸念が語られた。今後連携を期待している地域資源は特に回答がなく、これは既に連携を取っている活動が充実していることや地域連携を行う上での課題として挙げた「担当する教員の負担」に起因するものと考えられる。

自然を活用した保育・幼児教育に関する教育実践について、他の協力者とは異なり、授業の中で「野外活動」の取り組みが実践されているという報告を得た。この取り組みは所属する大学の魅力の一つとして位置付けられていると考えられる。地域連携による学生の学びについては、活動の運営に携わる学生とそうでない学生と学びの質に差が出てしまうことに懸念を示しつつも、全ての学生に「野外活動の楽しさを知る」、「野外での技術を修得する」といった学びがあったこと、運営に携わる学生においては「企画力」、「子どもとの関わり方の指導力」、「振り返り等でPDCAについて考える実践力」、「リスクマネジメント」などのリーダーシップ育成に関わる学びがあるということが報告された。

学生の苦手意識の克服に向けた取り組みについて、中高生の時期に自然体験や虫に触れる機会から疎遠になってしまうことを要因の一つと捉え、大学生になった後に、学生自身が虫について調べたり、それらを用

いた模擬保育を実践したりする中で、徐々に抵抗感が薄れるが、全ての学生に当てはまるわけではなく、苦手意識を持つ学生は一定数いることを報告している。

保育者の体験不足や経験不足を補うために毎年研修を実施しており、その内容は、ヨーロッパへの研修旅行や森のようちえんへの引率、土曜日保育における学生の子どもたちへの遊びの指導など様々であった。学生の活動を保育者が見ることで、それは保育者側の勉強にも繋がっているという実感をもっていると話されていた。

## (3) 調査協力者Cの概要

調査協力者Cは私立大学に所属する教員である。元々のボランティア団体や企業の地元支店、市の委託を受けたNPO法人と地域連携を行っている。今後連携を期待している地域資源は無く、現在行っている3つの団体との連携が充実しており限界であることを話された。地域連携を行う上での課題も特に挙げられなかったが、調査協力者Cは元々ゼミ活動の一環で行っていた活動が大学ホームページや口コミによって現在連携を行っている団体に伝わり、地域の方から連携を要請されたということであった。

実施している教育実践は、学生が地元小学生とともに竹林でモノを作る体験活動、地元企業の社員の子どもの対象とした学生による森林体験活動の企画とその提供、地元の親子を対象とした自然の中で遊ぶ活動などであった。虫嫌いの学生はおおよそ7割近くいるものの、自然との体験を繰り返し行うことで学生に変化が見られると話されており、それは2年間活動をした学生と1年間活動した学生の間で顕著な差が見られると報告している。また、学生が地域に対し主体的に関わることで、社会人の基礎力のようなものが育まれているという実感を得ていた。

保育者の体験不足、経験不足に関して、調査協力者Cは行政のキャリアアップ研修の中で自然に触れる研修を行っている。但し、現場に出向いて行う研修は受講型の研修が主になっている。40代の保育者であっても自然体験が不足していることを実感することがあり、研修の意義を十分に感じ取っておられた。

## (4) 調査協力者Dの概要

調査協力者Dは私立大学に所属する教員である。地域連携においては、行政の助成金を活用した活動に取

り組んだり、地元の親子を対象とした活動を展開したりされている。今後連携を期待している地域資源として、附属園や近隣の幼稚園や公民館を挙げられた。地域連携を行う上での課題は他の調査協力者AやBと同様にコロナ禍や担当する教員の負担を挙げられた。

主な教育実践の内容として、地元の親子を対象として自然の中で遊ぶ活動を挙げており、親子遊びに学生が参加することで、保育現場と同じような経験ができることに意義があると話されていた。実習以外で、学習したことを実践する場がないため、現場に類似した経験を積むこと自体に成果を見出していた。

学生の虫嫌いに対して、2週間程度ダンゴムシをそれぞれで飼育させ、飼育観察日記をつけたり、レポートを書かせたりしていると報告された。しかし、それでも虫嫌いの学生は残るとしている。

## 2) まとめ

ヒアリング調査のまとめを次に示す。第一に、研修を実施している教員はわずかであるものの、養成校での取り組みが学生の教育活動だけでなく、保育所や幼稚園等への研修にも繋がり、学生と保育現場に対する専門性の向上の一助になっている。そして、虫嫌い、自然体験不足の学生が多くいるが、それぞれの教員が授業やゼミ活動等を工夫しており、アンケート調査と近似した語りが得られた。また、調査協力者B・C・Dへの調査から、地域連携を通じた養成教育が大学の魅力発信や地域からの信頼獲得に繋がっている可能性や学生の主体的な活動から実践力や専門性の向上など、実施する内容によっては保育実習と同等または異なる成果が得られることが示された。但し、地域連携や自然体験活動の実施に際しては、教員のオーバーワークや短期大学における教育課程の過密さ等課題があることが分かった。

以上のように自然体験活動やESDを取り入れた養成教育を行うことは「保育現場への研修」や「養成教育の質の向上」に繋がり、養成校と保育現場の質の向上という好循環を生み出す可能性があることが示された。

## IV. 総合考察

### 1. 養成校における自然体験活動・ESDとその教育的効果

KJ法によって抽出したカテゴリーを次のように読

み取った。

養成校に通う多くの学生は、自然や環境、動植物に対して関わった経験が少なく、それらに対して食わず嫌いのような苦手意識を持っている。学生の体験不足を補ったり、苦手意識を解消したりするために、養成校の教員は自然や環境などに関わる実体験が大切と考えている。この体験をする際、学生たちが自然の中で気持ちよさや解放感・面白さや感動、興味・関心などのプラスの感情を抱くことができるように工夫が行われている。また、体験することは自然や環境について考え、持続可能な社会の創り手として学びを得る機会であり、自然や環境への意識向上につながることや体験を通して様々な学びがあり、環境構成や指導案作成に活かすことで、知識と体験が伴う保育実践にもつながることが期待できる。

### 2. 養成校の地域資源との連携・協働

回答者数は少なかったものの、様々な地域資源との連携・協働が行われていることがわかった。また本調査はコロナ禍の中で行われたものであった。コロナ禍によって中止に追い込まれた活動も見受けられたが、その中でも地域資源と連携・協働した自然体験活動・ESDは領域「環境」や「保育内容の指導法（環境）」等の授業の一環やゼミ活動として行われており、コロナ禍の中でも各養成校で工夫して実践されていることが考えられる。

保育士や幼稚園教諭の養成教育上、保育・幼児教育施設と実習などで関わりをもつことは必然となっており、すべての回答者が保育・幼児教育施設の子どもと関わりをもっていることは当然の結果といえる。それ以外の項目との関わりについては大きな違いはみられなかったことから、各養成校の地域性を活かし可能な範囲での協力体制をとっていることが伺える。ただ、保育・幼児教育施設との連携・協働について不十分と考えている回答者が半数以上いたことについて「時間確保の難しさ」を挙げている回答は四年制大学の教員にもみられ、カリキュラムが過密とされている短期大学に限らず、四年制大学でも現在の養成カリキュラムの中に保育・幼児教育施設と連携・協働した自然体験活動・ESDを行うためには工夫が求められていることが考えられる。

以上から、各養成校は、自然や環境に対する体験不足や苦手意識を持つ学生が多い中、地域資源と連携・

協働して知識や実体験が伴う特色ある活動を行うことで、学生がプラスの感情を抱き、意識向上するよう文化や伝統とも関連付けながら持続可能な創り手としての学びが得られ、保育実践と繋がるよう教育内容を工夫していることが示された。その一方で活動は十分ではない現状も明らかとなった。ヒアリング調査では、地域資源と連携・協働した自然体験活動やESD活動を取り入れた授業やゼミ活動を展開することで、保育現場と養成校の質（学生の実践力や専門性の修得など）や養成校の地域における信頼性の高まりが期待できるということが推察された。

本研究の一部は、保育者養成教育学会第7回研究大会（2023年度3月）・令和5年度全国保育士養成セミナー学術研究助成成果報告（2023年9月）において発表を行った。また、本研究は令和4年度全国保育養成協議会ブロック研究助成を受け行ったものの一部である。

## 謝辞

お忙しい中、本研究にご協力くださいました保育者養成協議会、中国・四国ブロック養成校の先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 注

注1) 文部科学省資源調査分科会（第28回）配布資料「地域資源の活用を通じたゆたかなくにづくりについて」では、地域資源に厳密な定義はなく、「①非移転性（地域性）②有機的連鎖性③非市場性」の三点の特徴があり、具体的には「人材」「文化」「施設」「コミュニティ」「自然」等を指すと明記されている。

## 引用文献

- 1) Richard Louv, 春日井晶子（訳）, 『あなたの子どもには自然が足りない』, 2006, 早川書房.
- 2) 藪田弘美, 「地域の自然環境を活用した保育実践について－非認知的能力を視点として－」, 『環太平洋大学教職教育研究』, 1, 2018, 27-34.
- 3) 川端和也・福満博隆, 「ESD自然学校における子どもを対象とした短期自然体験活動の教育効果に関する一考察：非認知能力に着目して」, 『鹿児島大学総合教育機構紀要』4, 2021, 76-83.
- 4) 桑原千明・小野屋春香, 「小学校における自然体験活動

の心理教育的効果の検討」, 『文教大学教育学部紀要』52, 2018, 119-127.

- 5) 富田久枝, 『ESDに関する国際的な動向 持続可能な社会をつくる日本の保育－乳幼児期におけるESD－』, かもがわ出版, 2018, 7-10.
- 6) 環境省, 「幼児期における環境教育体験活動事例集～環境教育で持続可能な地域へ」, <https://www.env.go.jp/content/900499178.pdf>, 2022年5月19日取得.
- 7) 中央教育審議会, 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校, 及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf), 2022年5月19日取得.
- 8) 無藤隆, 『我が国における「森と自然を活用した保育・幼児教育」の動向 森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック』, 風鳴舎, 2018, 27-33.
- 9) 堤裕美・酒井真由子・千葉直紀, 「保育者養成校における自然保育の学習カリキュラムの検討－卒業生への質問紙調査の分析から－」, 『上田女子短期大学学術研究誌所報』1, 2022, 73-86.
- 10) 稲垣孝, 「自然体験活動の経験値が保育士を目指す学生の自然体験活動の効果に及ぼす影響」, 『佛教大学大学院紀要. 教育学研究科篇』51, 2023, 1-14.
- 11) 中村真緒, 「『保育内容 環境』における自然体験活動と保育学生への教育的効果」60, 2022, 35-42.
- 12) 塩崎みづほ・新戸信之, 「保育者養成校における野外活動実習（夏）のあり方に関する研究－NEALの資格取得効果と学生の学びの振り返り－」, 『秋草学園短期大学紀要』35, 2019, 112-118.
- 13) 酒井真由子, 「信州型自然保育研修会における短期大学の役割－『信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～』事業を通して－」, 『児童文化研究所所報』40, 2018, 113-124.
- 14) 上田美和・寺眞智子, 「『自然保育』に関する認定が保育士の意識と行動に与える影響」, 『上越教育大学研究紀要』, 39 (2), 2020, 395-404.
- 15) 磯部美良・遠藤晃, 「宮崎県内の幼稚園・保育園における環境教育の実態調査」, 『南九州大学研報』, 44B, 2014, 54.
- 16) 岡健吾, 「幼児への自然体験プログラムの実践と展望～保育現場と保育者養成校の連携による地域実践を例えに～」, 『札幌大谷大学・札幌大谷短期大学部紀要』

48, 2018, 103-108.

- 17) 常木静河・田口正和・菅沼教生・高井吾朗, 「教員養成課程の学生を対象とした大学構内の竹林を使った自然体験活動の実践」, 『教養と教育』, 22, 2022, 22-29.
- 18) 木村紗帆・野崎健太郎, 「保育者および教員養成課程の女子大学生が虫に抱く意識：虫嫌いの仕組み」, 『椋山女学園大学教育学部紀要』9, 2016, 109-119.
- 19) 教育未来創造会議, 「我が国をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）」, <https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/pdf/220510honbun.pdf>, 2022年7月1日取得.
- 20) 中央教育審議会答申, 「次代を担う自立した青少年の育成に向けて（答申）」, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07020115.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07020115.htm), 2022年7月1日取得.

# "Nature experience activities" utilizing local resources at childcare training schools, "ESD/SDGs" and effects and challenges in training education

Funakoshi Miyuki\* · Katata Hiroyuki\*  
Kato Tomohiko\* · Takahashi Taidoh\*\*

## Abstract

In November 2022, we conducted a questionnaire survey targeting teachers in charge of classes on nature and the environment at childcare teacher training schools that are members of the National Childcare Teacher Training Council Middle/Shikoku Block. The survey examined the educational effects and issues in training education for the five categories of "nature experience activities" ("outdoor activities," "learning activities related to nature and the environment," "cultural and artistic activities using natural materials," and "primary industry (agriculture and fishing)") and "environmental education. Teachers at nursery teacher training schools point out that many students lack experience in interacting with nature, the environment, animals and plants. Therefore, they tried to incorporate real-life experiences related to nature and the environment in classes and seminar activities to increase students' interest and interest and generate positive emotions. In addition, hands-on experience is an opportunity to learn as a creator of a sustainable society, and is expected to lead to increased awareness of nature and the environment. There are various things to learn through experience, and by utilizing them in configuring the environment and creating instruction plans, it is expected that this will lead to childcare practices that involve knowledge and experience. There are various things to learn through experience, and by utilizing them in configuring the environment and creating instruction plans, it is expected that this will lead to childcare practices that involve knowledge and experience. Furthermore, classes and seminars that incorporate nature experience activities and environmental education that collaborate and cooperate with local resources can be expected to improve the quality of childcare sites and training schools, and increase the trustworthiness of training schools in the local community.

Keywords: Childcare worker training, Nature experience activities, environmental education, ESD/SDGs, Education Collaboration with Local

---

\*Osaka College of Social Welfare and Health, Department of Child Care and Education

\*\*The University of Shimane, Department of Child Care and Education